

非認知的能力について

2017. 6. 30 遠藤清賢

非認知的能力を育てることが子どもたちの将来にとって重要であることが世界の保育、乳幼児教育において確認されてきています。非認知的能力とは自制心、思いやり、良い人間関係を構築する能力、そして、目標に向かって努力する忍耐力、自己肯定感、自分自身を信頼する能力、そして、多くの人たちと協力し、支え合って生きる能力、等であると捉えています。

知識や情報処理能力を高めるための計算や読み書き等の能力を認知的能力と言いますが、幼い時期からこの認知的能力を高める訓練を受けた子どもと、そのような訓練を受けていない子どものIQを比較すると、早期教育を受けた子どものIQは高くなりますが小学校高学年くらいになるとIQの差は殆ど無くなるそうです。このような認知能力を高める教育より、自制心や思いやり、忍耐力等の非認知的能力を乳幼児期にしっかり身に着けた児童の方が大人になった時、経済的にも、精神的にも良い結果に繋がっていることが確認されています。

世界は認知的能力を高める早期教育より、非認知的教育、保育の重要性が確認され非認知的能力を身に着ける教育や保育に移行しているのです。日本の教育は数学や国語等の成績を重視している点に於いて世界の方向性とは逆行しているという報告もあります。以前はこの非認知的能力は成長に従って子どもたちが個別に獲得する能力のように捉えられていたようです。しかし、近年この能力は大人が子どもたちに意図を持って伝えなければならない能力であることが確認されたのです。特に誕生から就学前のこの時期は人間の精神や生活、人間関係の基礎を身に着ける大切な時期です。自制心や忍耐力は強制的に叱るとか、注意などで躾けるのではなく、豊かな愛情と沢山の受容される体験を通して非認知的能力を身に付けることが重要なのです。心から楽しむ体験や保育士や仲間との楽しむ遊びや様々な体験によって、同じく、家族からの揺るぎない信頼と愛情によって他者を信じ、信頼し、支え支えられる関係性を身に着けることができます。

日本の教育は学力と成績によって子どもを評価し成長を判断していますが、この見えない非認知的能力こそが子どもの本当の姿であり、評価すべき視点なのだと思います。計算が早くできる、難しい言葉を理解する、運動能力が優れている、等、そのことは確かに優れた能力であるかもしれませんが、しれは人間性を表現する全てではないと思

ます。子どもたちが将来をより良く生きる本当の能力は非認知的能力の獲得が非常に重要なのです。この見えない能力を私たち保育に携わる者はしっかりと理解し、個々の子どもたちの心の中を確認できる保育を身に付けることが求められます。

この能力はただ放任しているだけでは育たないのです。この能力を高め、育てるために私たちは、先ず子どもたちの姿を観察し、時には仲立ちなどの対応や、子どもの話を傾聴し、その姿を記録することによって一人ひとりの子どもたちの姿を把握することです。保育士一人ではなく多くの職員の多角的な視点によって把握することでより子どもたちの姿が見えてくると思います。そのために子どもたちの姿を共有する時間を設ける必要があります。そして、様々な意見をまとめ、子どもたちの姿を基に保育計画を作成し、保育を実践します。その中で子どもたちがどのような反応があったのかを記録します。記録の中に評価や反省をして、今後の保育に繋げて行くのです。ここで、特に注目しなければならないことは、子どもがどのくらい集中して遊ぶことができたのか、子どもが自分の意志を伝え、仲間に理解してもらったのか、仲間と心から楽しみ遊びや活動ができたのか、等、忍耐力や集中力、思いやり、自信、等、子どもの姿を的確に見守る能力を持つことが求められます。そして、それぞれの子どもたちを励まし、出来たことを子どもと共有し、喜び合い、心から楽しむことによって、非認知的能力は育まれるのだと思うのです。

実際に、今まで保育園で行われてきた保育は非認知的能力を高める対応をしてきたと思います。子どもたちの主体的な活動を尊重しながら、豊かな愛情による言葉かけや遊び、様々な体験、絵本や歌、リズム、運動、そして食育活動、等はまさに非認知的能力を高める保育を取り組んできました。私たちはこの保育について意識的に非認知的能力を高める保育をしてきたというよりは、これが子どもたちの将来に、また成長に繋がる保育であると確信を持って取り組んできたと思います。

ここで改めて今までの保育を見直し非認知的能力を高める保育について整理することが求められると思います。今まで行ってきた保育について私たちは自信を持って、子どもたちの成長を支える働きがいかにあるべきなのか確認することができると思います。